



—世界に飛び出した「秋田人」—

46歳で美術の都パリに飛び出す 小西正太郎

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

秋田県は、江戸時代から多くの著名な日本画家を輩出しているが、洋画家が日本画壇で活躍するようになったのは、小西正太郎が初めてである。

小西正太郎は、明治9年7月、仙北郡六郷町(現美郷町)の富豪小西忠兵衛の長男として生まれた。正太郎は、生まれつき虚弱な体質で小学校の通学にも送り迎えが必要であった。家に帰っても外で遊ばず絵ばかり描いていた。ために父は息子に地主の跡継を期待せず、自分が書画骨董に興味があるところから、息子には好きな道を選ばせた。これが、画家小西正太郎誕生の遠因であろう。

彼は明治28年、秋田中学から東京美術学校予科に入学し、田舎の秋田出身者では当然のことのように日本画本科に進んだ。しかし、翌29年、西洋画科が新設されると、正太郎は西洋画科に編入した。

それは、明治26年、フランス印象派を学んだ黒田清輝が帰国し、29年には東京美術学校の教授に迎えられたからである。黒田は、切手になった箱根芦ノ湖の湖畔で団扇を使い夕涼みをする美人画で世に知られているが、紫派とも呼ばれる外光を取り入れた明るく甘い画風が、当時の若い画家達に大きな影響を与えた。

正太郎は、学生時代から画業には熱心で才能

もあつたので将来を嘱望されていたが、当時としては珍しい高級カメラを所持し、現像までも手がけるようなゆとりある学生生活をしていて、艶聞も絶えなかった。その学生ぶりが、同郷の人気作家小杉天外(1865年～1952年)が「読売新聞」に連載していた『魔風恋風』に登場する人物のモデルになったと言われている。

当時、「読売新聞」は、尾崎紅葉『金色夜叉』が大人気で、その紅葉没後の「読売新聞」の連載小説が、小杉天外の『魔風恋風』である。

その小説は才色兼備で知られる帝国女子学院の生徒萩原初野と帝大法科の子爵の夏本東吾との恋愛を主軸に物語は展開する。

当時、女子学生は珍しくその風俗は世間の人々の興味をひいた。物語では彼女たちが自転車に乗ったり、タバコを喫ったりした。その彼女たちと当時の憧れの帝大法科の学生が恋愛事件を起こす。新風俗を描いた『魔風恋風』は大好評、新聞は売り切れ、増刷したりもした。その恋愛物語でヒロイン初野に恋心を持つブルジョア青年美術家殿井恭一のモデルが、小西正太郎であったようだ。

両親は正太郎のために保養も兼ね神奈川県茅ヶ崎海岸にアトリエを建ててやり、彼はそこで療養生活をしながら絵を描いていたが、病は好転しない。明治37年、帰郷し横手中学校の美術

教師として教壇に立つが、病気を理由に8カ月で退職、その後7年も療養生活を送る。都会から農村に帰り、その風景の美しさに心を動かされ農民美術に関心を持つこともあったが、彼の健康が、山野のスケッチを許さない。絵を捨て切れない彼は田舎での生活に不満であった。六郷町の人々に推されて明治44年県議会議員になったこともあるが、議会中は、知事や他の議員の顔をスケッチばかりしていたという話が伝わっている。議員は一期で辞めた。

その後正太郎は、秋田の田舎に雌伏していたかに見えるが、心中はそうではなかったようだ。大正理想主義の時代になり、日本人の目がヨーロッパ、ロシアに向き出すと正太郎の頭も大きく回転した。大正10、11年、東京美術学校時代の友人中沢弘光、跡見泰、山本森之助、矢崎千代治らが次々と渡欧するのを知り、彼は「46歳まで生きた、後は自分の好きなように生きよう」と決意して、屋敷の一部を売り払ってパリに向かった。人生50年という時代である。彼の決意に、人々は驚いた。

正太郎はパリに渡り、パリ・アカデミーの会員となり、スペイン人画家オルティガに師事した。3年目、彼の才能はパリで一挙に開花した。大正13年、サロン・ナショナル展に応募した80号「臥せる裸婦」が入選し、ベルギー王室美術協会展に応募した60号「赤い着物の女」も入選した。当時の日本人留学生は西洋美術を学ぶのが精一杯で、美術展に入選することは稀であった。彼の成功は日本人の西洋画家には考えられない成果であった。彼の絵は、人物絵に集中している。日本人画家の多くは、日本と違うヨーロッパの大陸的風景とパリの個性的な街並みに驚き、風景画に筆を走らせたが、彼はあくまで

パリで人物を描いた。中でも裸婦が多い。

大正14年には、パリ・アンデパンダン会員にも、サロン・ドートヌヌ会員にも推された。これはパリで個展が開ける称号でもあった。彼はパリで個展も開き画家の成功者として、15年凱旋将軍のように帰国した。

帰国した年には、三越で個展を開き、昭和2年の帝展に「水浴後」という裸婦画が入選したほか、数々の展覧会に出品し好評を得た。

アトリエを学生時代からの茅ヶ崎に、住居は世田谷池尻に構え、絵画の自由研究所を神田錦町に開き勤労画学生を指導した。

そして、その自由研究所は、秋田県美術界の発展にも大きく貢献した。昭和3年2月11日には、東京在住の秋田県出身の画家や彫刻家が集い、親睦を図り美術の発展を目指そうと秋田美術会を結成した。集まったのは、日本画家の福田豊四郎、貝塚裕之、高橋萬年、花岡朝生、彫刻家の大場清泉、相川善一郎、佐々木素雲らであった。また、秋田の美術界の重鎮平福百穂を顧問に迎えた。同会は小西正太郎にも呼びかけ、本部事務所を自由研究所に置いた。

自由研究所の神田は地の利も良く、昭和4年に第1回秋田美術展を東京有楽町の東京朝日新聞社ギャラリーで開催した時にも、作品の保存、搬送にも便利し、展覧会は成功した。同展は5月には秋田県でも開催され、地方での展覧会の先駆けにもなった。小西正太郎は、百穂の死後は顧問に就任し秋田県美術界の発展に大きく貢献した。

小西正太郎は充実した画業生活を送ったが、戦争には勝てず、昭和19年には69歳で郷里に疎開し、昭和31年4月、秋田で平穏な人生を閉じた。享年81歳。